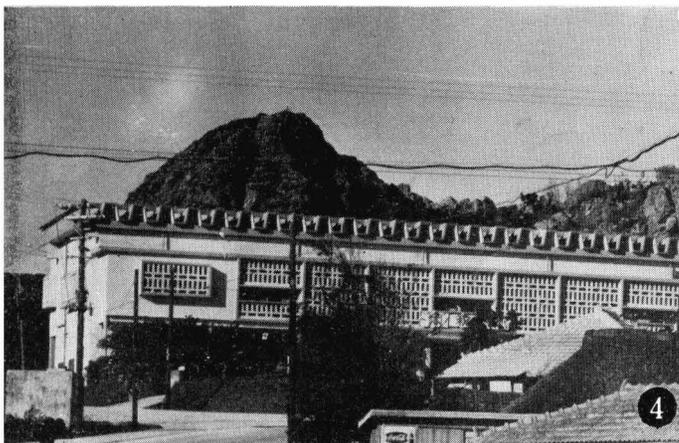
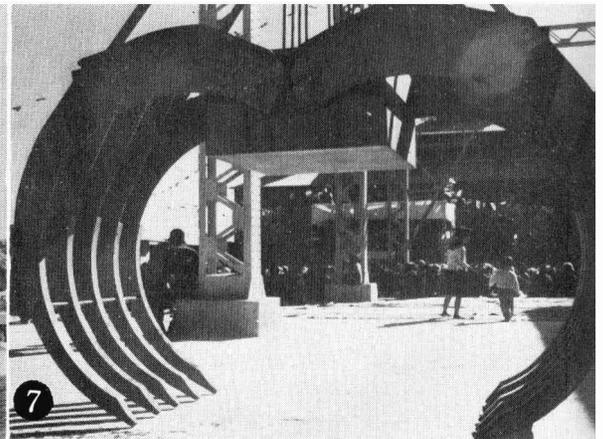
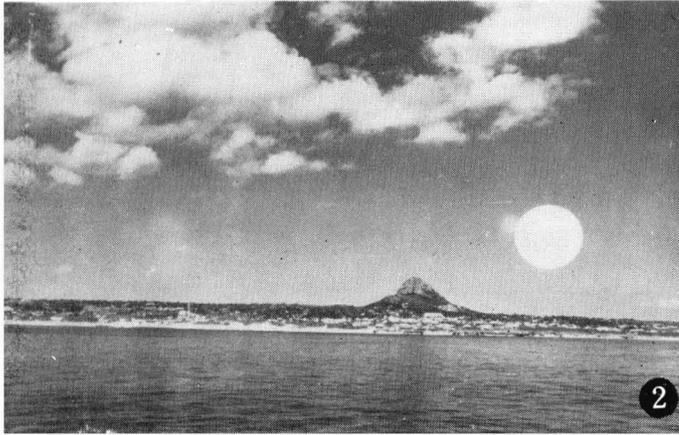
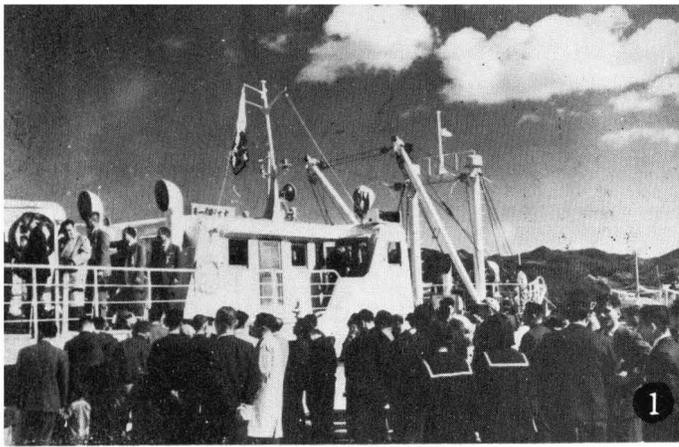


琉球大学学術リポジトリ

芽ばえる農村のハイライト ー伊江村の巻ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古謝, 瑞幸, Koja, Zuiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20515



芽ばえる農村のハイライト

伊江村の巻

本部半島の西方、ほど近いところにキノコを逆にしたような格好のいい島がある。これが一島一村の伊江村である。

農村文化が芽生え出した今日、典型的なケースとして紹介したい。同村には本土の中央に出して優るとも劣らずの村庁舎、村立病院、農協ビルなどの施設が完成した。また、村の基本産業である製糖工場は150トンに増設され、本島を結ぶ近代的な鉄船も完備した。こうした一連の農村の基本施設の完備に伴って機械化農業も普及し、高鳴るトラクターの音響と共に、農村の夜明け前をかなでている。まさに「文化は地方から」と言いたい。

では同村の近況をカメラのレンズを通してのぞいてみよう。

写真① スマートな第一伊江丸90トンは村と本部間の1万mを30分で横断する快速である。本船が誕生して以来、村の人々は「離島」という言葉を忘れたという。名産黒糖を積出す傍、シーズンには島を訪れる観光客を案内するのに忙しい。写真は渡久地港で客を乗せる同船。

写真② 第一伊江丸から見た同村の遠望。向って左3分の1の所に白い煙突のある建物は伊江村農協の製糖工場。ぐすく山（イータッチウ）のふもとの高い建物は村庁舎。

写真③ こんどは望遠レンズでのぞいてみよう。タッチウの左ふもとは伊江中校、右は村庁舎、その左手前は村立病院、その左は映画館、山の中腹の白い建物は展望台。

写真④ エキゾチックな外観を呈する村庁舎。二階のホールは村議会と村民の集会所だが、その設計と装飾は本土の中央に出しても少しも劣らない。縦横に走る屋外の高圧線は、島の隅々まで昼夜間電気を送っている。

写真⑤ 全琉でも異例の村立病院。入院室もすばらしいが、手術室は無影燈を設置するなど近代科学の粋がとり入れられている。「ここに入院すればハミガキ粉をのんでも病気は治るよ」と誰かが冗談をとばす程だった。

写真⑥ みるからにきれいな農協ビル。内部は事務所と売店。那覇でも見られないシャンデリア（枝形花電燈）までも吊下ったデラックス版。来年は二階、再来年は三階と増築の予定もあるという。

写真⑦ 「わか村は田地なきため砂糖を増産して米を購え」は同村の村是。150トンに増設された農協の製糖工場は黒糖工場としては全琉で最大。写真のグレンは今日までケンキャンリヤーで人力によってなされたキビの荷さばきをするもので、画期的な効率をあげている。

写真⑧ 機械化農業の普及は生産を高め、青年に夢を与える事によって高く評価されている。現在大型4台、小型30余台のトラクターが普及している。写真はタッチウの西側で荒地を起すトラクター。

写真⑨ 外来者の目をひくもの一つは防風林のすばらしさ。また、考える農民達によって進んだ農法が普及しつつある。写真はその1例で同村西崎におけるキュウリの早期栽植。風よけにビニールを利用している。

写真⑩ 「濃き山もあたりに生うる緑葉も その座を占めて海と照り合う 小林寂島」は本誌の発行人島袋俊一博士のよんだ歌で、よく背後の山と前面の海とマッチする。写真はその歌碑で名所タッチウの中腹にある。1961年12月23日 除幕直後写す。

写真⑪ アメリカの有名な従軍記者アーニー・パイルの記念碑。彼が戦死した場所に建てられているがこんな平和な場所でありし烈しい戦争の事実をうたがいたくなる位のところである。

写真⑫ 4、5年前まで各地で見られたサーターヤー（製糖場）。写真は筆者が1958年3月同村出張の時にとったスナップだが、こんな短い才月の間に現在の科学的工場に刷新されるとは驚くばかり。特に対照のためにかかげた。
(古 謝 瑞 幸)

